HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ

| タイトル | 現代中国の環境論(10) - 「工業文明から生態文明への範式変革」(2023) - |
|------|---|
| 著者 | 庄,貴陽;鈴木,光; Zhuang, Guiyang; SUZUKI, Hikaru |
| 引用 | 北海学園大学法学研究, 61(1): 117-132 |
| 発行日 | 2025-06-30 |

の生態危機を引き起こした。しかし生態文明の段階では、人態系統は切断され、生態均衡は激しい衝撃を受け、地球全体

(は自然を重んじ、自然に適応し、

自然保護を基礎として経

済発展を促し、生産生活様式を全面的に環境に優しいものへ

永続的に発展するためのしっかりした基礎を打ち立てるとと

向上し、

地球は新たな地質時代「人新世」の紀元に入り、

生

資料

現代中国の環境論

(+)

「工業文明から生態文明への範式変革」(二〇二三)

国社会科学院生態文明研究所 副所長 庄 貴 隱 (Zhuang Guiyang) 著

中

鈴 木 光 (Suzuki Hikaru) 訳

工業文明の段階では、人類の自然利用能力がかつてないほどは文明の隆盛、衰微、および遷移に直接的な影響を及ぼす。【要旨】生態環境は人類の生存と発展の土台であり、その変化

共生する中国式近代化の新たな一章を書き続け、中華民族がる。工業文明範式が持続可能ではない根本的な原因は、自然が調和し共生する近代化である」との提議は、まさに人と然が調和し共生する近代化である」との提議は、まさに人と自然が調和し共生する近代化である」との提議は、まさに人と自と変革させ、人々の全面的な発展を実現することが可能であと変革させ、人々の全面的な発展を実現することが可能であ

北研 61 (1·117) 117

るものである。
もに、人類文明が永続的に進歩するための中国式提案を捧げ

【中国分类号】C913【文献标识码】A【关键词】文明范式 工业文明 生态文明

でで、最終的に生態文明への範式変革を実現しなければなら 要失など地球全体の生態危機に直面し、工業文明から生態文 明への範式転換を推し進め、人と自然の関係を円満に処理す の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 がら離れ、経済発展の客観的法則に従い、生存に必要な物質 から離れ、経済発展の客観的法則に従い、生存に必要な物質 の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 則にも従い、発展の持続可能性を絶えず高め、価値観念の転 関にも従い、発展の持続可能性を絶えず高め、価値観念の ならず、自然の はのと である。このた の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の はの表である。このた の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の はい、発展の持続可能性を絶えず高め、価値観念の を関えているといい、生存に必要な物質 の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の はい、発展の持続可能性を絶えず高め、価値観念の を通 がら離れ、経済発展の客観的法則に従い、生存に必要な物質 の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 がられている。このた の基礎を絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 の表でを通 がらまるのよりにはい、生存に必要な物質 の表でを絶えずしっかりと地固めするのみならず、自然の法 の表でも、一般のは、 の表でも、 のまる、 のまる。 のまる。 のまる。 のまる、 のまる。 のなる。 のなる。 のな。 のなる。

ない。

および経済学的思考が含まれる文明範式には、豊かな哲学的、社会学的

はある文明の特徴と歴史的発展の傾向を表す。文明には人類下で形成・発展してきたある文明模式を指し、こうした模式定の歴史時期における、特定の地域および特定の文化伝統の文明範式とは、文明の形成と変遷の模式であり、通常は特

文明範式が時代とともに進展変化した結果である。が創造した物質的財産と精神的財産の総和が含まれ、

文明は

 特徴は、

ともに文明範式を構成する。

、類社会の価値観念、

制度構造、

および生産生活様式など

価値観念について言

うならば、

文明範式とは特定の社会思想と文化伝統が作り上

影響するもので、それらには自然、

社会、

および人生に対

ぎ発展するものであると指摘する。ダグラス・ノース

構造、および生産生活様式などの特徴を高度に概括するものも自然の法則に従属し、同時に、人類社会の価値観念、制度は自然の法則に従属し、同時に、人類社会の価値観念、制度は自然の法別に従属し、同時に、人類社会の発展を無秩序な注2)などはさらに文明範式を、人類社会の発展を無秩序な

あり得ず、 てはなく、 変化しようと、生態系統に内在する自然の法則を変える手立 為的に変えることもできるが、 法則は文明範式の基本規則である。 社会が自然の法則の下で発展し派生した結果であり、 文明範式と自然の法則は緊密に関係する。 自然の法則が文明範式に妥協することはなおさら 文明範式がひとたび自然の法則より優位に立とう 人類社会の文明範式がい 人類社会の文明範式は人 文明 範式は人類 自 然の かに

する自然の法則に適応するよう促す。発し、人類社会が文明範式を適度に調整して生態系統に内在発し、人類社会が文明範式を適度に調整して生態系統に内在とすると、生態系統は今ある人類文明に調整を命ずる信号を

係なども決定する。生産生活様式について言うならば、文明括すると同時に、社会構造、政治的意識形態、および権力関よび交換活動を組織する基礎となる特定の社会政治制度を包造について言うならば、文明範式は、社会の生産、分配、おする人類の認識と、信仰や道徳規範などが含まれる。制度構

第二は、文明範式変革の動機・原因の構造である。文明範は〕文明範式発展の重要な条件と基礎である。

ず、生産様式や生活水準とも密接な相関関係があり、

範式は社会の経済形態や科学技術水準と関連するのみなら

式の変革とは、

人類社会の価値観念、

制度構造、

および生産

変革を「文明範式Ⅰ─文明革命(文明転換)─文明範式Ⅱ」る一連の規則・規範の変化と理解し、これに応じて文明範式どの哲学者は、範式変革を、社会集団と個人の行動を指導す生活様式などの特徴の動向が遷移する過程を指す。クーンな

し再建するものでは決してなく、「既定の通念などを」受け継はないこと、つまり文明範式変革とは、既定の通念などを覆明範式変革とは「連続する」過程であり「打ち破る」過程でと著名な考古学者張光直(张光直)は、さらに一歩進め、文と表現する。ドイツの思想家マックス・ヴェーバー(訳注3)と表現する。ドイツの思想家マックス・ヴェーバー(訳注3)

北研 61 (1·119) 119

やジョン・コモンズ (訳注5)

などの米国の新旧制

度派

資

0 者の意向にあり、人の感覚的知覚が支配する選択と意思決定 経済学者は、さらに一歩踏み込み、 過程を通じて、社会集団が共通認識を持つに至る一連の規 文明範式変革の鍵は参与

範式変化を促すと指摘する。

を実現する。最終的には必然の王国 的解放を追求することで、人と自分自身の関係において自由 社会の関係において自由を実現する。より高い境地での精神 人と自然の関係において自由を実現する。 を獲得する過程である。 ものへと変革する。本質的には〔それは〕自然を認識し自由 環境に対する理解が一層深まり、 はじめに、歴史経験から派生する価値理念の進化である。 最も広範な人民の需要と利益を基礎とすることで、人と 思考力構造が完全なものとなるに伴い、自分たちの 自然の法則の尊重と把握を通じて、 文明範式もさらに高次元の (訳注6) から自由の王 社会の法則を把握

文明範式の中にはめ込まれる規則は、 に定義・執行される必要があり、 |則に二分されるが、 つぎに、正式な制度と非公式な制約の互換適正化である。 前者は国家あるいは組織を通じて強制 正式な規則と非公式な 般的には書面に記載さ

の飛躍が完成する。

化し完全なものとし、 させれば、 則の効力を制約する作用を有する。正式な制度を絶えず適性 暗黙の了解に依存するものであり、非公式な規則は正式な規 れる。後者には強制的な定義や執行がなく、 取引費用と不確実性を効果的に低減させ、 非公式な制約との互換性を不断に向上 より公衆の 文明範 間

ことが可能となる。

式制度の効果を大い

に向上させ、文明範式の変革をもたらす

類は新たな生産関係を打ち立て、生産力を高める要求に適応 の生産関係は生産力の継続的発展を阻害し得る。 より決まるため、生産力が向上し一定水準に達すると、 人と自然の間の関係を大きく改変した。生産関係は生産力に し、文明範式の生産力水準を著しく高め、人と人、人と社会 ある。技術進歩は生産の手段・様式の交代と格上げをもたら 最後は、 科学技術の進歩がもたらす器物生産様式の変化で それゆえ人 旧式

史を縦〔歴史的〕に見ると、文明範式の進展過程はおおむ 工業文明の段階では、 〔それらには〕人と自然の関係の転換が体現されてい 前工業文明、工業文明、および生態文明の三段階に分けられ 第三は、 文明範式進展の基本的論理である。 人類の生産活動は自然界に大きく依存 類社会 0 ね

文明範式の変革を推進させる必要がある。

要素が

自由

に流動

生産力の水準が大いに向上する。

らず、

古い

社会恒常性」

の衰退を経て、

新たな

社会

恒常

性

を育む前進する過程でもある。

そのうえ範式

の進

展

、過程では、

法則

は動態変化の状態にあり、

どのような法

組み 尊重 れ 見せ、 設計が社会の生産力の向 身従属関係が存在し、 る 革 は、 系統は無限に切 して 一業文明 場 'n 社会制 経 調 限され、 奴隷制度と封建制度の下では、 人と自 人類の生産生活様式は全面 おり、 済 生態労働が労働の普遍的な形式となり、 地球全体の生態危機をもたらした。 地球は新たな地質時代 和状態にならしめ 欠けてお 陳代謝の へ々の需 の段階 度の移り変わりは、 自然に順応し、 一然の お 現代の よび 加えて経済秩序と制度規範が比較的 ŋ では、 関係 要を満たし、 断され、 「断裂」 自由 自 製 は 品 由市場の 社会の分業と階層 低 競争を基礎とする社会制度であり、 人類の自然利用能力は空前 自然保護を基礎として経済発展を促 が起こり、 自然界の 心水準の てい 上を制約し、 0) 流 た。 文明範式進展の基本的論理 人々 通 「人新世」 範囲も 的に環境に優 生産力の [ような] の全面的発展を実現する。 正常な有機循環 資本主義制度は、 労働者と支配者の間 生態均衡に激 人と自然の 限られ、 の紀元に入り、 融通性と競争 間 生態文明の段 いい 9 低 人類は自 一効率の もの 関係を低 が 0 封鎖され 移 動は 高まり 11 かき乱さ 私有 てい へと変 衝 であ 一然を 階で 圏撃を に人 制 0 厳 生 制 た 水 能 を 生 度 仕 硬 格

明

範式を工業文明

から生態文明

へと進

展させるよう促す。

と人、人と社会、

間の関係を、

不自由な対立から自由な調和へと向

かわ

んせ、

文 0

人と自然の間の対立関係を改め、

それら

様式は、 と人民に幸福をもたらすことを目 程におい が盲目的に利益を追求することを制約し、 原則とする社会制 は、 広範 て、 実質的には公有制を基礎とし、 本 0 無限 国家がマクロ 囲の生態危機を引き起こす。 度である。 増殖と利 :潤の最大化を核心とするその コントロール 私有制度の排除を通じて、 標とすることを保障 労働に応じた分配を 生態資源の 社会主義 Ļ 全体的な供給 į 使用過

か

ある。 に否定し合う 式と古い文明範式の間は、 の需要を体現し、 様なものである。 続して繰り返し改善を行いつつ進展 人類社会の文明範式は、 同時 関係ではなく、 範式の進展は、 先進的な発展の方向を表す。 異なる文明範式の間では、 これでなければあれとい どのような時代でもみな柔軟で多 相 動態変化 互に比較 Ļ の過程であるのみな 変 社会構成 相 換できる関 新たな文明範 互作用の 員 た相互 0 中で

継

北研 61 (1・121) 121

資 固定されたり統一されたりしたことはなく、豊富で多様なも 初めから終わりまで普遍的かつ必然のものでもな したがって、 文明範式が進展する道はこれまで

初めから終わりまで偶然かつ特殊なものでは決してない

0)

のである。

中心とする人と人との間の関係の変化である 工業文明範式の変革は、 本質的には物質的な富を

n,

と変わった。工業文明範式の下では、 自然の間の衝突が絶えず悪化し、 の完全性は破壊され、「新陳代謝の断裂」を引き起こし、 工業化された大生産が必要とする生産要素となり、生態系統 互いに入り交じり影響し合い、生態系統は無限に切断され 業文明範式の下では、 飛躍的向上を促し、人類の物質に対する需要を十分に満たし 界化は工業文明範式の普及を推し進め、 資本主義制度の確立と産業革命の出現に伴 しかし、資本の無限増殖と利潤の最大化を核心とする工 人類の不合理な生産様式と消費模式が 次第に世界的な生態危機 人類の物質生産の法則 社会の生産力水準の 1, 経済の全世

> 明範式の中にはめ込まれた反生態的な弊害が次第に姿を現 1 に向上し、 人類の文明の継続的発展を脅かし、 物質文明が極めて豊かになった。 人類を再び文明範式 しかし工業文

変革の岐路に立たせた。 第一に、 工業文明範式のおもな特徴である。 十八世紀中期

の産業革命以来、蒸気機関の普及により生産力が大幅に高ま

人類を徹底的に農業文明から工業文明へと向かわせ、

化

算になる。 ぞれ数倍から数十倍向上した。同時に、 力循環から離脱し、 向上させた人類社会の生産力水準と資源利用効率は千倍 力が絶えず高まった。 能力の増強に伴い、一定の土地 化といった新工業革命に伴い、生産力は再び少なくともそれ 電力の普及、およびデジタル化・人工知能化・ネットワーク バイオマスエネルギー(訳注7)を動力とする低水準の生産 石エネルギーで駆動する機械化・自動化の生産時代を迎え、 能力水準の遷移を実現した。内燃機関と 全体的に言うならば、 (資源) あたりの人口収容能 技術進歩と経営管理 工業文明範式が

の文明形態であることがわかる。そのおもな特色は、 工業文明は、工業化と機械化を重要な特徴とする現代社会 工業化、 都市化、 法治化と民主化、 社会階層の流動性の おおよ

に対する認識と把握が飛躍的な進歩を遂げ、

生産力水準が大

動などの領域

の改善に注目

人類社会の物質文明を低

ま

13

的に言うならば、

系統が協調して発展する仕組みが比較的脆弱であった。

業文明範式の内部構造は、

に発生する制約にすぎないものと見なさ

れ

生態系統と経済

生 準の迅速な高まり な経済成長などに表れる。 産規模の拡大、 非農業人口比率の大幅な上昇、 は、 人口数の激増を引き起こすのみなら 工業文明範式がもたらす生産力 および持続 体労

強

化

教育

の普

及

情

報

伝達

0) 加速化、

労働

0

分業組織

化

水

働を行う小規模な手作業製造加工工場

生産力と生産関係の間の矛盾を惹起し、手作業や肉

するのに適応してい

た前工業文明の範式制度は大規模な機

うならしめる。

(小作坊)

の生産を組

な流動を実現 械化・工業化による生産力の発展を阻害するようになり、 力を売りに出 主義の私有制が天命に従って出現し、 生産要素は低い経済費用と高度な経済収益により す自 経済社会のすべての要素と生産効率が大幅 由を獲得 Ĺ 商品 市場の仕組 労働人口は自身の労 みが大きく 充分 資

お 中心とする人と人の間の関係の変化であり、 ある。 0 式であろうと、い 所有制、 物 質生産· 工業文明の範式変革は、 労働生産関係、 方の 向 ずれも物質生産力の向上を模索する段階 Ŀ 13 関連する思考構造、 産出分配の仕組みなどが含まれ、 本質的には、 それには生産手 制 物質的な富を 一度規則、 器

全体的に言うならば、

前工業文明範式であろうと工業文明

せず、 失という代価と引き換えに、 収益から逸脱させ、 隠蔽化され、 みを注視しており、 しかし、 準 から高水準へと進展させるよう促すことを目的 関連する価格や市場の仕組みは経済的な費用と収益 工業文明範式は人と自然の関係について充分に考慮 個人的 最終的には、 生態的 な行動決定の費用と収益を社会の費用と な費用と収益は一 個 人の経済的収益が 通常、 社会全体の福利の 定程度外 増加するよ 部 損

変化した。 下では、 物質的な富の蓄積を追求し、 が大きく発展 工場での生産から雇用労働による大規模工場化した生産 応じて、 第二は、 生産組織様式は自給自足の小規模な手作業製造 手作業や肉体労働が機械に取って代わら 同時に、 工業文明範式の内部構造である。 Ĺ 各方面は 資本主義の私有制を基礎とする商品 目前の効果や利益を求め 生態環境の損益は経済発展の外 工業文明範式 九 て焦り、 7 加 n

体現され ず、 価値観念は、 3 線形非循環と一 次元の思惟論理 に従う。

工業文明範式において盛んに行われる線形非循環思惟様式を 工業文明範式の下では、物質利益至上主義思想の主導を受け 次元という二大特色を有する。このうち線形非循環とは 済行動の主体の価値観念が従う思惟論理は、 線形非循環と

低くなることを意味する。 部化し、 範式が利潤最大化という発展論理に従い、 生態均衡が失われ、 生態系統が受ける外部的衝撃が絶えず強まる結果を 経済社会の持続可能な発展能力が 生態環境費用を外

続性のない生産消費模式が派生する。一次元とは、工業文明

し、ここから「原材料

7-製品-

-廃棄物」という線形かつ持

原則となり、 ようなところへ置いてもみな正しい な衝撃をもたらした。同時に、 を使用し、その後それを捨て、 経済発展を実現するため大量の製品を作り出し、大量の製品 かな物質的富をもたらしたが、その経済制度体系は、 として組み立てられている。工業文明範式は、人類社会に豊 つぎに、経済制度体系は、大量生産・大量消費模式を基礎 および廃棄を基礎として確立されており、人類は 加えて国民経済計算体系 一次元的な経済制度が、 生態系統の均衡に比較的 〔普遍的妥当性を持つ〕 (SNA) [A System of 大量生 大き

和のとれた発展に不利な影響を与える。

National Accounts

が資本循環論理の中にはめ込まれ、経済

差の改善といった根本的な任務には注意を払わない。 主体の行動は資本の無限増殖と利潤の最大化を手段的目 生態環境保護、社会全体の幸福の向上、 および貧富の格 そのう

的支えを形作ることが困難となる。 規則をうち立て、 社会の持続可能な発展に対する強力な制 生態的な効果と利益に無限に代わりうる、

持続可能性の低い

え生態権の価格化・貨幣化を通じて、経済的な効果と利益が

資本の論理は、 文明範式の下では、経済学理論は実質的には、 人と社会、および人と自然の関係を緊張させ、 なく放出し、度を越えた余分な物質消費をもたらし、人と人 づき「一般均衡」の経済世界を推断し演繹する。これにより、 局所最適な手段的目標を追求し、 ロの区別をその経済理論論理の基礎とし、「ミクロ」的または 最後に、経済主体の行動は経済的理性の原則に従う。 人の物質的豊かさを求める強い欲求を絶え間 かつ理性的な人の仮定に基 経済社会と調 マクロとミク 工

北研 61 (1・124) 124

ことが可能となる

に、

生態文明範式

0

おもな特徴である。

工 一業文明

範式

は、

化学化・

機械化などの様式を通じて自然の正常な有機循

ことを基礎とし、 望ましい未来像を明示する 生態文明は、 本質的には工業文明範式を止揚する 人類社会の文明範式変革に

いを定め、 工 の環境に基づき、 文明範式変革は、 人類の文明範式の変革を推し進め、 共通認識の規則を調整する過程である。 本質的には、 人類が、 自身が身を置く場

造をきちんと整理し、か を明示する。このため、 ことを基礎とし、人類社会の文明範式変革に望ましい未来像 うとする。 人類社会の持続可能な発展を制約する点を徹底的に改変しよ 点に狙いを定め、 展を制限する物質的基盤の弱点を徹底的に改変する。 類社会の文明範式変革を推進する正しい方向を探し当てる 生態文明は、 生態文明は、 前工業文明の生産力水準の低さという弱点に狙 精神と生態の分野における生産上の欠陥が 物質主義 つその制度的基盤を明示して初めて、 生態文明範式のおもな特徴と内部構 本質的には工業文明範式を止揚する [唯物論] の下での工業文明 人類社会の発 同 0 弱 様

> 惟に欠け、 機を引き起こす。 て大きな社会の幸福を失う代わりに、 よび経済成長を統一 潤最大化と一般均衡原則を信奉し、生態保護、 の関係のつながりの維持を考慮しないため、 を提供するものの、人と人、人と社会、 乱暴な改良進歩様式は、 環を作り替え、 注意がすべてに及ばない状態に容易に陥り、 物質生産力を向上させる。 工業文明範式は、経済系統の一 的に計 人類の生存繁栄に充分な物質的保障 一画し協調させようとする系統的思 表面的な経済成長を受 および人と自然の間 このような単 あまねく生 社会発展 次元的な利 極め

お

け取り、 然の間のより広大な関係の探求に正面から取り 対応しなければならないことがわかる。 満足へと転換しているさなかにあり、 的需要の保障から、 んでいるおもな困難は、 社会の発展を阻害する。 より難度の高い持続可能な発展の要求の まさに、 生存に必要な基本的な物質 人類社会の より上 したがって、 発展が 一級の文明範式で 組む生態文明 直 人と自 面

成果を基礎とし、 の低さを放逐せず、 生態文明範式への変革過程においては、 工業文明範式の下での、 工業文明の発展がもたらした物質文明の 汚染してから管理 決して物質生産性

範式が、天命に従って生まれたのである。

するという伝統的な発展の道筋への依存から離脱

北研 61 (1・125) 125

ことをしたり、

ほしいままに振る舞ったりしてはならない

ければならず、思うままに振る舞ったり、

やみくもに手荒な

人類は自然を改造すると同時に自然の法則に従わな

強調しているところにある。

人類は、

全面的な節約戦略を実

てはならないことがわかる。 要がある。 保護しつつ質の高い発展を実現する新たな道筋を探求する必 物質生産力の向上を通じて人々の物質生活水準を高めなく 生態文明範式と工業文明範式は似ており、 しかし両者の違いは、 生態文明 いずれ

よう促す必要がある。 経済社会の発展を、 に市場が導く環境に優しい新たな技術を考え出す体系を打ち なく低炭素型で安全かつ効率の高いエネルギー体系、ならび 環境に優しく 環境に優しく質の高いものへと転換する 低炭素型の生産様式と生活様式を育て、

環境に優しく低炭素型で循環発展する経済体系と、汚染が少

産業やエネルギーなどの構造調整の推進に力を注ぎ

有 化への文明昇級を実現する。 実現を促すが、 人と人との間の矛盾が絶えず激化する。 化の程度が比較的 一業文明への範式変革は、 生態文明への範式変革は量的変化から質的変 高く、 物質的な富の分化が進むにつれ、 工業文明範式の下では、 同等の段階の文明に 一方、 生態文明範式 量 的 富の私 飛 躍 0

まず、

価

値観念は、

非線形と循環可能な二次元の思惟論理

5, 共同 社会の関係の調和の程度が極めて大きく高まる。 抜け出し、自由かつ全面的な発展の実現が可能となり、 な生態労働へと転換することを促す。 生産労働を雇い入れるものから、 文明への範式変革は、 人と人の間の関係は、 経済の複線へと変遷し、富の公有化の程度が絶えず高まり 下では、 公共財産をともに生産し分かち合うという主導のもとに して共に勝つものへと次第に移り変わる。 富の分配の仕組みが、 生産組織形式が、 私有財産主導の下での優勝劣敗競争か 経済のみの単線から生 集団行動が一致した自発的 個人は資本の束縛 資本が受動的な商品 同時に、 生態 から

および行動原則 次元的な生態経済の次元へと遷移させ、 会系統の内部構造に関連し、 もな原因である。 ている。生態次元の秩序の混乱は、 め入れておらず、 効な内部構造を形作ったが、 人類社会のために経済社会系統における一連の一次元的な有 第二に、生態文明範式の内部構造である。工業文明範式は、 の三分野において体現する。 生態環境の損益を外部的制約にとどめおい 生態文明範式の構築は、 真の意味ではまだ生 次元的な物質経済の次元を多 生態危機を引き起こすお 価 値観念、 生 態系統と経済社 態要素を納 制度体系

0

力強い支えが作り上げられる。

益の転化能力

の向

上を

通じて、

社会の持続可能な発展のた

かつ生態の効果と

態環境の費用にも関心が向けられる。

これにより、

生態文明

生

範式変革の内発的原動力が強化され、

確立し、

生態価

値が次第に大衆に広範囲に受け入れられ、

展を支える作用を充分に認め、 念の下で、長い目で見た幸福のパレート改善論理 産消費模式に従う。二次元とは、 理念と方法を用いて問題を観察し、 「原材料―製品― 生態系統の価値とそれが有する経済社会の持続的 資源再生 生態系統と経済社会系統 人類が、人類運命共同体理 製品」という持続可能な生 問題を解決することを重 (訳注 の結 8 発

に従う。

生態文明範式の下では、

人と自然が調和

し共生する

値観念が次第に樹立され、

経済行動の主体は生態経済学の

体

生態文明範式は、生態環境保護を経済発展の主な原則とし 構築を通じて、新たな生態経済次元の秩序を打ち立て、 善に従う。 幸福を内部化し、生態系統と経済系統の結合と発展を促す。 つぎに、生態経済制度体系は、 生態価値を実現する仕組み、 生態文明範式の下では、 および生態保護制度などの 本質的に、社会の幸福 人類は、 生態経済統計体 生態 0 改

ż,

生を促す。

合と持続可能な発展を推し進めることを意味する

生産様式を、 幸福の最大化の追求を目的とするよう方向を変え、 障するという基礎の上に、 度と物欲享受の追求を目的とせず、基本的な物質的要求は保 はなく物質生産効率による効果と利益を追求する。 化関係を統一的に計画を立てて考慮し、 様式へと変え、それにより生態保護と経済成長の間 求の下で、 系統のエネルギーを持続可能な形で循環・交換させるとの要 が利潤最大化の追求を目標としていたものから、社会全体の 0) 最 行動が生態理性の原則に従うとは、 余分な生産消費は最大限低下させ、 効率が低く、 経済主体の行動は生態理性の原則に従う。 効率が高く、 高度な汚染をもたらし、 不必要な物質占有や消費欲求を抑 汚染が少なく、 単純な生産最大化で すなわち、 人と自然の 消費も少ない生産 消費の多い 人類 かつ二大 経済主体 0 調和と共 動態変 経

生態文明の発展範式を打ち立てる基本的 な道

近代化とは、 新たな時代・ 中 国共産党第二十回全国代表大会報告が指摘した 新たな道のりにおいて人と自然が調和し共生す 人と自然が調 和し共生する近代化であ 中 国式

炭素

排 出量

削減、

汚染減少、

緑の拡大、

および

成

生態保護に対しても新たな要求を提示した。 中 -国を建設するための戦略的配置を作り 出 したの すなわ

ちこれは、人と自然が調和し共生する高度な発展計画の側に

革を推進する制度的優位性を備えており、 の道である。中国は、 工業文明範式から生態文明範式への変 その基本的な道筋

長をも共同して推し進める、工業文明を超える新たな近代化

を育てるという四領域が含まれる。

制度体制の建設を推し進め、

環境に優しい生産生活様式

は、

政府と市場の関係を適切に処理すべきである。

生態文明範式

発展と環境保護、

部分と全体、長期目標と短期目標、

および

価値観念を新たに作り直

物質文明の基礎を突き固め、

化し作り上げられた新たな文明形態であり、 の公共性を絶えず強調する必要がある。 生態文明は前工業文明と工業文明の後に続いて徐々に変 一に、生態文明への範式変革は物質文明を基礎とし、 縦 〔歴史的〕に見る 人類社会が進歩 富

を受け継ぎ、 上の要求であり、 は人類の物質文明、 変化した結果である。 充分に満たされたのちに発生変化した新たな文 人類の文明上の要求が高い等級へと昇格 精神文明、 横〔のつながり〕を見ると、生態文 政治文明、および社会文明

うと焦って生態環境を消耗し物質的な富を作り出す

た結果である。

生

一態文明範式は、

目先の成功や利益を得よ

的

「享楽主

進化し、

ひいては経済社会の発展水準を新たな高みへと向か

義 な物質文明を放棄してもう一度原始生活状態に戻る「禁欲主 的な発展模式ではなく、 工業文明 一範式がもたらした豊か

対し、我が国は生態文明範式を探究する過程において、 保障するという最低条件を確保しなければならない。これに 発展の基本的な側面を充分に考慮し、 義」的な発展模式でもない。生態文明への範式変革は、 人民の基本的な生活を 経済

状態を強調しており、 人、自然、および社会が永続して歩調を合わせ発展する これは物質文明を基礎として、 自然の法則を依拠すべき規準とし、持 資源環

を建設する。 産が発展し、 続可能な発展、 境の積載能力に頼り、 生活が裕福になり、 同時に、 および人と自然の調和と共生を目標とし、 生態文明への範式変革は、 生態が良好である文明社会 工業文明範

単純な私有の物質的富の数量を増加させるものから、 から精神的領域や生態的領域へと広げ、 包するものを深化させ延べ広げ、すなわち単一 式下における精神的生産と生態的生産の弱点を補い、 な公共財産が人々 の幸福の改善・変化を構成するもの 人類の富の蓄積は 的な物質 多次元 富が内 社会の発展を推し進

める模式を捜し求めることを必要とす

体的には、

経済分野では、

環境に優しい発展理念は

0)

範式変革は、

強制的な生態保護制度を構築する必要があ

的理性から生態的理性への変化の促進を必要とする。生態文第二に、生態文明への範式変革は、価値観念の一新と経済

せることが可

持することは発展観の一 環境に優しい発展理念の樹立である。 値は普遍的に賛同され、 然の関係を対立から融合へと変えるよう促して初めて生 価 どを包含する。まず、 価 性 団 必然的な選択である。 値観、 ち生態を優先し、 生 0 値観は、人と自然の関係に対する気遣いを体現し、 「へと変えるよう促進することにある。 の共通認識たる一連の規則範式を経済的理性から生態 一態労働参加 低 能な発展を基礎として全く新たな一連の発展模式、 範式変革は、 いものから秩序立った効果の高いものへと促し、 環境に優しい発展観、 への内発的原動力が大幅に高まる。 資源を節約し、 目 生態価値観を育てることである。 生態文明への範式変革の鍵は、 下 つの奥深い ひいては生態資源管理を無秩序で効 の経済社会の持続可能な発展にとり および人類運命共同体理 環境に友好的な様式で経 根本的な改革であり、 環境に優しい発展を堅 生 態的 理 性は、 つぎに、 社会集 人と自 生 す 公衆 態価 生態 念な 的 生 持 な 態 理

的に推し進

んめる。

を推 優しい る。 成果を世界と分かち合 態文明への範式変革を以て人類運命共同体を打ち立てること 価値を発揚する。 を講じ、 源 れにより調和のとれた良好な人間関係を築くことを重視 能な発展を実現することを強調する。 低炭素型で効率が高く、 利 め、 し進め、 用の持続可能性を強調し、 環境分野では、 発展理念は、 環境に優しい技術と環境に優しい産業を通じて持続可 自然環境の破壊を回避する。 同時に、 国際と国内という二つの大局から始め、 社会の公平と全人民の参加を促進し、 環境に優しい発展理念は、 中国の生態文明へ 13 環境に優しい 人類社会の持続可能な発展を全面 科学的な環境管理と管理 社会分野では、 最後に、 様式で経済発展を推し の範式変革の 生態保護と資 全人類共 環境に 経 通 生

進め、 れ 統の秩序を補 制度構築を通じて、 要とする。 た二元関係を疎 生態経済の二次元的な秩序規則を打ち立てることを必 生態文明へ 生態文明へ 通させる必要があ かつ生態系統と経済系統の 工業文明範式の下で不足してい の範式変革は、 の範式変革は、 る。 生態経 制度体系の建設を推し この 互い ため、 済 の二次元 に引き裂か 生 た生態系

資 市場などの分野から、生態文明範式を支える制度体系を構築 てる必要もある。 るのみならず、健全な生態製品価値を実現する構造を打ち立 一方では、法律、行政管理、 財産権、 および

するが、これには生態環境を破壊すれば終生責任を追及する

普惠)(訳注9)

制度を樹立し、

低炭素に関する宣伝教育を強

時に、 ち合う構造を完全なものとし、 業の経済的な効果と利益を向上させ、 どの分野が含まれる。 立てること、生態環境保護の監督査察制度を推進することな 制度を作り上げること、 おいては、生態国土空間の計画と保護を推し進めると同 ミクロ的な分野で生態財産権取引市場を作り上げよく 産業生態化と生態産業化の進行過程を加速し、 他方、 資源の節約と循環利用の構造を打ち 財政主導型の生態補償制度の完 生態文明範式への転換を助け 生態からの配当を分か 生態産

備され、

汚染減少と炭素

〔排出量〕削減が共同でもたらす効

に優しい発展へと転換しなければならない。 優しい生産生活様式を育み、 ことが必要である。 活様式を育み、人々の生態価値に対する普遍的賛同を高める 益市場 第四に、生態文明への範式変革には、 の強い インセンティブ制度から大きな制約を受けて 中 国 の生態文明へ 経済社会の発展を全面的に環境 の範式変革は、 環境に優しい生産生 生態環境が生態 環境に

る環境下で、

環境に負荷をかけない生産能力を高めること

る。

場主体の生産様式を環境に優しい低炭素型へと変える内発的 は、 企業の競争力と投資価値を高める重要な道筋となり、

原動力を強める。そのうえ、カーボンインクルージョ

発展空間をもたらし、 に、環境に負荷をかけないエネルギーへの投資は広々とした う誘導し、生態価値の普遍的賛同を高めるのを助ける。 化するなどし、公衆が環境に優しい生活習慣を身につけるよ 炭素排出権取引市場が次第に構築・整 同時

展し、 果が環境を持続的に改善し、環境に優しい食品のプレミアム 出されるのを早め、生態に関する健全な一大産業が迅速に発 現象や有料の生態体験などの一連の独創的な商業模式が生み 生態製品価値を実現する構造が日増しに完全なも

なる。 変えるよう促し、 とすることで初めて、 が導く環境に優しい新たな技術を考え出す体系を完全なもの 構造を改善し、 再生可能エネルギーの利用比率を積極的に高め、 エネルギー資源の配置利用効率を高め、 かつ環境に優しく低炭素型で循環発展する 生産生活様式を環境に優しいものへと 市場

絶えずさらに高い水準に向かって建設されるよう促し得るの 生産体系、 流通体系、 および消費体系を形成 生 態文明が

展新范式》,

《中国人口・资源与环境》,

二零二二年第一期

員である。 (筆者は中国社会科学院生態文明研究所の副所長、 かつ研究

号:2023STSA01) 文明范式下协同推进降碳减污扩绿增长机制研究)」 生態文明範式の下で炭素 注:本稿は、中国社会科学院生態文明研究所の創新 および成長を共同で推し進める構造に関する研究 の段階的成果である。】 〔排出量〕削減、汚染減少、緑の拡 工程 (项目编 (生态 頃目

思主义研究》,二零一二年第九期

⑥杜明娥:《生态文明:人类社会文明范式的生态转型》,

《马克

⑦邬晓燕:《论技术范式更替与文明演进的关系 色技术范式引领生态文明建设》,《自然辩证法研究》,二零一 兼论以绿

訳注

六年第一

期

【参考文献

①庄贵阳、王思博、 逻辑》,《青海社会科学》,二零二二年第四期 窦晓铭等:《生态文明建设与 / 双碳/ 行动

②刘会强:《发展观的范式变革》,上海:上海社会科学院出版 二零一零年

③王雨辰:《构建中国形态的生态文明理论》、《武汉大学学报 学社会科学版)》, 二零二零年第六期。 哲

④金碚:《工业化从机器观向生态观的衍生》, 《中国发展观察》,

⑤黄晶、 |零二二年第七期 彭雪婷、 孙新章等:《可持续革命 塑造人类文明发

> 訳注1 1 トーマス・サミュエル・ クー ン (Thomas Samuel

Kuhn, 1922-1996) を指す。

ダグラス・セシル・ノース(Douglass Cecil North

1920-2015)を指す。

訳 注 2

訳注3

訳 注 4 ダグラス・セシル・ノース(Douglass Cecil North

(Maximilian Carl Emil Weber, 1864-1920) を指す。 マクスィミーリアン・カール・エーミル・ヴェーバ

.920-2015)を指す。

訳

注

5

ジョン・ロジャーズ・コ

モンズ

(John Rogers

Commons, 1862-1945) を指す。

訳注 6

界観を持たず、必然性の支配を受けている境涯を意味 必然の王国とは、 人間が客観的因果律を認識 した世

北研 61 (1·131) 131

訳注7

する。 版』九五頁(大修館書店・二〇一〇年)参照 愛知大学中日大辞典編纂所編 『中日大辞 典

biomass energy. 有機物系廃棄物から得られるエネ

ment 4th edition)二六三頁(中央経済社・二〇一九年) する有機物から得るエネルギーのこと。丹下博文編 養など、動植物の生物体(バイオマス)が生成・排出 あるいは生物による石油成分の抽出、水素発酵菌の培 ルギーを指す。海藻や廃棄物・糞尿を発酵させた燃料、 「地球環境辞典 第四版』(Dictionary of Global Environ

参照。

訳注8 ず、少なくとも一人の経済状態を高めることができる よう資源配分を改善することを意味する。金森久雄・ る資源配分を変更するとき、他の経済状態を悪化させ 1848-1923) が提唱した考えである。ある集団に対す ド・パレート (Vilfredo Federico Damaso Pareto 荒憲治郎・森口親司編『有斐閣 Yuhikaku Dictionary of Economic Terms 5th edition, イタリアの経済学者・社会学者であるヴィルフレ 経済辞典 第五版

し上げたい。

温室効果ガスの削減に参加する社会の実現を目指 す

組みのこと。

訳者あとがき

者が挿入した。翻訳に際しては、庄貴陽先生と曹維君 を得て試訳したものである。文中の〔〕 贵阳。Zhuang Guiyang)「从工业文明到生态文明的范式变革」 Weijun)先生より貴重なご指導をいただいた。心より感謝申 九八~一零三頁)を、原著者と『人民论坛』出版部のご承諾 (『人民论坛』(人民論壇) 二零二三年七月下期、 总第七六五期 本稿は、中国社会科学院生態文明研究所副所長・庄貴陽(庄 部分と訳注は訳

参照。

取